

# 関西いのちの電話広報誌

No.109号 2001年7月1日発行

見出し案内 \* 関西いのちの電話「理事長就退任」にあたって

\* 相談員ノート「いのちの電話」モードに！34期 Y.H

\* 2000年受信状況の傾向

\* いのちの電話の使命を考える < 共感のコミュニティを築く > 長尾文雄

\* < チャリティーコンサートのお知らせ > 7月29日(日)いずみホール

\* 新シリーズ『字遊帳』 < 師 >

## 関西いのちの電話「理事長就退任」にあたって

「いのちの電話」は、相談員を中心とした多くのボランティアによって成り立っています。毎年、新しいボランティアが生まれ、旧きボランティアが退き、組織としての新陳代謝を繰り返しながら活動を続けています。このたび、3期(6年)にわたり、関西いのちの電話理事長を務めてこられた酒井哲雄さんが、理事長を退任されました。この間、創立25周年(1998年9月)諸行事が開かれ、また環境設備の充実などに力が注がれ、理事長としてご尽力くださいました。心より感謝申し上げます。新理事長には、理事今村一之さんが就任されました。いのちの電話での良きリーダーシップを発揮してくださいますようお願い申し上げます。「いのちの電話」の活動・役割の原点をしっかりと見すえながら、次代の「いのちの電話」にも眼を向け、今後とも共に歩んでいきたいと思えます。

---

## 「いのちの電話」モードに！34期 Y.H

2年間の研修を終え、相談員となって1年が過ぎた。研修の時は、講義やグループや電話に入るとき、「いのちの電話」モードに自然に気持ちが切り替わり集中できたと思うのだが、相談員となった去年は、生活にも少し変化があって、そちらに気持ちが向き、グループにしても電話にしても慌しいまま入るという状態で気持ちが「いのちの電話」

モードになりきらないままだった。そして、そのことは、居心地が悪く何とかしたいと焦るばかりで、いまだにそういう状態が続いている。この3年間で初めての壁だ。確かに、聴くことの難しさや共感できないなど、たくさんの壁は今までにもあるのだが、集中できないほどしんどいものはない。これではダメだと自分を責める。A帯には入った。集中できるようにと思いながら電話をとった。内容はともかく気持ち的に私にもわかるようなことで、一方的に怒った口調で話されるがそんなに聴きづらいということはない。「そうですね。」と相槌を打ちながら聴いていた。そのうちに、私の中にも思いが湧いてきて、何か言いたくなってきたが、私の電話ではないと言い聞かせていた。ワンパターンになっている聞き方に、相手もわかってもらえていないと感じたのか、どんどん話される。私はこういう気持ちで聞いているということを簡潔に伝えたいのだが、しっくりいかないまま2時間が過ぎた。私の中で悶々としていたその気持ちと、相手の話とが重なって何気に「悶々としますねえ。」と伝えると、その言葉に「そうなんです。」と反応された。それから少し声も穏やかになり、まだ1時間ほどは話されるのだが、少しは通じたような気がした。その1時間は、普通の会話のようになっていたかもしれない。長い電話だったが、私は集中できたことや少しは通じたかなという雰囲気はどこかすっきりしていた。相手はどうだったのだろうか。どの電話でもいつも感じる思いである。はっきりとした答えには出会えないが、やはり続けていきたいと感じた。そのためにも「いのちの電話」モードに切替えて行こう！

---

## 2000年受信状況の傾向

受信総数 19,540 件、昨年より 293 件減。年代別でみると、30代 29.4%、40代 23.5%、20代 21.3%、50代 15.5%。内女性 30代 17.6%、40代 17.1%は総数の 34.7%を占める。問題内容別では、人生 19.6%・健康 20.9%・夫婦 11.5%・家族 11.1%。いずれも女性からの相談が多い。男性のみでは、人生 19.5%・健康 20.9%の合計で 40.4%。性と相談外(テレフォンセックス)の総数比は 14.1%。心の病を持つ人の相談は 40.3%、内治療中は 28.8%。自殺傾向は、1,984 件で総数の 10.2%。20-30 才代で自殺傾向総数の 62.6%、同年代の女性で 41.9%。自殺傾向の 80.9%が心の病を背景にしている。

---

## いのちの電話の使命を考える < 共感のコミュニティを築く > 長尾文雄

最近、連日のように新聞紙面に踊る見出しには、心痛むさまざまな事件が報じられています。「幼児虐待」「メル友による殺人」「インターネットを媒介とした自殺ほう助」「自

殺者 3 万人を突破」「学校での理由なき無差別殺人」などなど。「いのちの電話」の運動は、1953 年のロンドンでスタートしました。重工業を主軸とした工業化社会の発展とともに、農村から都市への人口流入を促進し、いわゆる地域・地縁型のコミュニティが崩壊していく時代であったのです。生活は豊かになり、便利になると引き換えに、従来の大家族から核家族へと変化し、さらに資本主義経済の競争原理による過度のストレス、都市への集中による住環境の悪化などが顕著になってくるのです。急激な都市化はかつての牧歌的なコミュニティの崩壊と個人の孤立化、「孤独」という病が出現してきます。また、さまざまな障害をもつ人々は、コミュニティのつながりの外に置かれるようになるのです。日本においても 1970 年代、高度成長の歪みである公害などが顕在化する時代に「都市」の片隅で、困難や危機にあい、誰ひとり相談できる人もなく、自殺などのさまざまな精神的危機に追い込まれた人たちの聞き手になり、感情の支えをする運動として生まれたのが「いのちの電話」です。電話という媒体を活用して、悩みを抱えた人が地理的条件を超え、いつでも、どこからでも、ボランティアの聞き手とつながりを持つことができるシステム。それが「いのちの電話」です。それは悩みに耳を傾けて聴き、受け止め、その人の存在を認め、不安や怒り、悲しみや喜びを分かちあうことを目的にしたコミュニティです。「いのちの電話」は創設の時からこのような新しいコミュニティを試行していたのです。「関西いのちの電話」には、年間約 2 万件の電話がかかっています。昨年の傾向で言うと、何らかの心の病を背負った人からの電話が約 40%、自殺傾向を示すものは約 10%を占めています。自殺傾向の約 1900 件の約 80%が心の病を背景としているのです。さらに年間 200 から 300 件近くかけてくる頻回通話者の占める件数も増加しています。電話の向こうから聞こえてくる相談者の心の叫び、苦しみ、混乱、さびしさ、不安、恐怖、怒りなどの感情が込められた声は、連日報じられるニュースの背後にある大きな深い暗闇からの叫びのようにも思えるのです。モノにあふれた生活、あふれるような情報に囲まれた生活、手軽なコミュニケーションを可能にするメールや携帯電話などの環境を持ちながら、母親は育児に悩み、若者は表面的なコミュニケーションに翻弄され、心を病む人は誰からもその辛さを理解されず、子育てを終えた女性は身体の変調と人生の意味を見失い、追い詰められた中高年の男性は相談することも無く自殺に走り、そして高齢者は尊厳を奪われていく。このような時代の真っ只中で、いま一度、「いのちの電話の理念や使命は何か」と自らに問い、電話で「聴く」ことの質を向上させなければならないと思うのです。「いのちの電話」の目的は、困難や危機にあって、誰ひとり相談できる人もなく、自殺などのさまざまな精神的危機に追い込まれる人たちが、再び生きる喜びを見出されることを願いつつ、よき隣人として活動することです。いまの社会のなかで孤立した人々を、電話を用いて、心と心、気持ちと気持ちを分かちあうコミュニティに招くことです。どんな環境にあっても、人は生き生きとした「いのち」を生きる権利を持っています。それが損なわれて助けを求める人にかかわりを持つこと、そして自分に与えられている「聴く」力を

用いて、ともに支えあいつなかりを築くことです。このような共感のコミュニティとなることが「いのちの電話」の使命です。

---

### < チャリティーコンサートのお知らせ >

今年は「夏の夕べは弦楽の調べで」というタイトルで左記のように、コンサートを企画しました。親しみやすい曲目を、若手の音楽家のみずみずしい演奏でお楽しみいただけると存じます。また、クラシックに造詣の深い、テレビでもおなじみの日下部吉彦氏のお話もご期待ください。夏の一日、夕涼みがてら、いずみホールへいらっしゃいませんか。広報・企画チームヴァイオリン：溝川合歓演奏：シルクストリングカルテット司会：日下部吉彦日時：2001年7月29日(日)午後6時～場所：いずみホールチケット代前売 2,000円当日 3,000円 お問い合わせは関西いのちの電話事務局 TEL06-6308-6868

---

### 字遊帳<師>

数十年も前のことで、その後の出来事さえほとんど忘れてしまっているのに、ある空間だけが妙に鮮明に現実味を帯びて思い出されることがある。小学4年生星組の時のこと。担任は初めての男の先生だった。算数の授業中、私たちは何かの課題に取り組んでいた。先生がみんなに向かって「たばこ、すってええか。」とたずねた。そのとき、すかさずおちゃめなMちゃんが「先生がたばこを吸うのは私らがお菓子を食べるのと同じやからいけないと思います。」と答えた。「そやなあ。」先生は、すぐにたばこをしまった。先生は先生として、一線を画していた私にとって、とてもまばゆい出来事だった。Kちゃんは、妹の世話をするため学校も休みがちだった。ある日、Kちゃんは妹をつれて学校に来た。先生は、妹を膝に座らせて授業をし、給食の時間になると自分の分を分けて一緒に食べていた。みんなが妹のことを大切に思っていて、一緒に遊べるのがうれしかった。何気ない教室での一コマだけど、私はこの出来事を思い出すたび、あたたかいお湯につかっているような心地よさを感じ肩のあたりがホッとする。時々、心の中の先生に会いにいった励ましてもらっていたが、ここ数年ご無沙汰していた。数日前、久しぶりに先生の方から会いに来てくださったような気がした。

32期 Y.U

---

十三句会より<季節の俳句>

花衣むぐやまつはる紐いろ

杉田久女

花見から戻って着物をぬぎながらの身のけだるさを詠んだもの。背後に女の業といったものまで窺われるという解釈も。(1890～1946)

梅真白さらりと初心問はれけり栄子

一読して心が洗われる思いがする。季語動かず。

春だねと一行だけの娘のメール和子

平成の句。一行だけに物足りない気持ちもある。

還暦の夫と向かひて蜆汁紀子

一輪を落としてみせる山椿文子

二人ゆく二人の顔の遍路かなこうめい

老いてなお雛を飾りて語りけり公子

戦跡に慟哭聴こゆ春疾風喜美子

---

< 相談電話受信件数 >

受信月受信件数相談員数(延)

3月 1,433件 425人

4月 1,590件 480人

5月 1,620件 501人

---

< ありがとうございます >

NTT西日本大阪支店様 10万円NTTドコモ関西様 50万円

杉本光男・杉本良二様 10万円S.Y様 10万円

---

就退任(2001.6.26)

理事長退任酒井哲雄氏(頌栄短期大学学長)

理事長就任今村一之氏(今村繊維工業株式会社取締役)

理事退任酒井哲雄氏(同上)小島浩子氏(臨床心理士)

理事就任増澤良彦氏(松下電器産業株式会社客員)

谷川俊一氏(大阪キャンプ協会理事)

---

< 編集後記 >

地下街のショーウィンドウには、一年中の花が咲き、憂うつな気分もしばし晴れる。しかし、公園で雨に濡れている紫陽花を見ると、なぜかホッと気持ちぐやさくなる。癒しの言葉やグッズが氾濫しているけれど、はたして心に届いているのはどのくらいあるのだろうかと思う。A.I

---

社会福祉法人関西いのちの電話

〒532-0028 大阪市淀川区十三元今里 3-1-72

TEL.06-6308-6868FAX.06-6308-6180

発行人今村一之

編集報編集チーム